

重要文化財【桑野遺跡出土品】冬季特別展示

— 玦状耳飾小型品・半欠品と成形痕 —

あわら市郷土歴史資料館
特別展示室

平成 24 年 9 月 6 日、[重要文化財／考古資料]に指定された「福井県桑野遺跡出土品」は、桑野遺跡から出土した縄文時代早期末から前期前葉を主とする出土品一括です。

指定品は、玦状耳飾などの石製装身具を主体とする石器・石製品、合計 85 点から構成（他に附として水晶原石 1 点加わる）されています。出土品の多くは原位置に近い状態で出土、特に玦状耳飾は素材・製作技法などを対で揃えた事例が多くみられます。それらは縄文時代の人々の装身や葬送儀礼を復元する上で重要であり、わが国を代表する出土品であるとともに、環日本海域に於ける縄文文化の特質と交流を解明する資料として、その学術的価値は極めて高いものと評価されました。

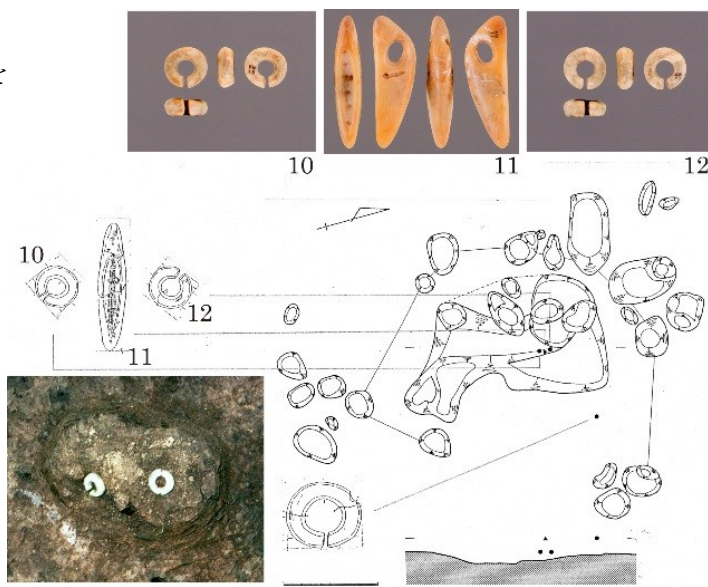
平成 28 年度冬季展示では、桑野遺跡から出土した玦状耳飾の小型品、半欠品と成形の際の痕跡がよくわかるものに注目し、抽出してみました。

《小型品》 手前：臙脂フェルト敷

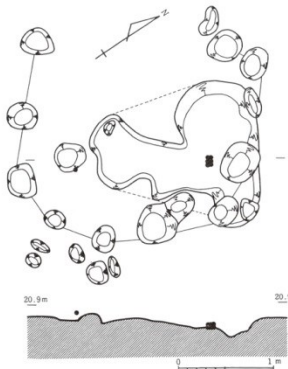
桑野遺跡出土の玦状耳飾の中から、ここでは、小型品を抽出してみました。

上段左の（KW10・12）は、長楕円形（178 cm×推 90 cm）を呈する 5 号土壙（第 1 図）の東北の肩部付近から、出土した小型玦状耳飾完品 1 対です。鯉節形垂飾 1 点も一緒に検出されており、3 点が直線に並置していました。

小型玦状耳飾 1 対は、相互に 11 cm 前後の間隔があり、鯉節型をなす有孔垂飾が対品に挟まれ、上部凹部面に刺突紋の施された部位を、上面かつ立位の状態で、玦状対品より 12.5 cm 高い位置から出土しています。



第 1 図 5 号土壙



第2図 6・7号土壙

下段の（KW40・41）は、長楕円形土壙（推 205 cm×124 cm）を呈する 16 号土壙の北東隅肩部、土壙長軸の北側より偏して検出された、小型塊状耳飾完品 1 対です。異型石器 1 点（第 4 図）と一緒に出土しています。これら 3 点の出土位置は、三角形を形成し、検出した高さもほぼ同じでした。

また、塊状対品のうち、北方で検出された KW40 は、切目端部の片方が欠失しており、転用など何らかの意味合いがある可能性が考えられます。



第3図 KW20

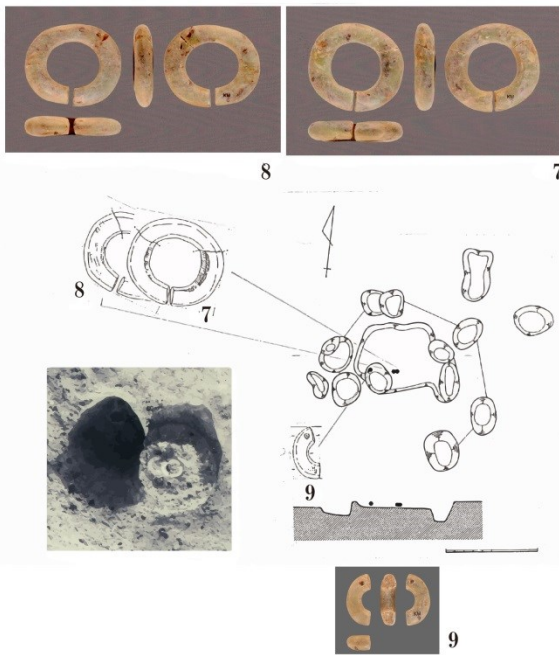
上段右の（KW20）は、6号土壙に近接する7号ピット(径 34~36 cm)の肩部（第2図）から検出された、白色材の小型塊状耳飾完品 1 点（第3図）です。この白色材の小型塊状耳飾は、桑野遺跡出土の塊状耳飾中最小で、長さ・幅ともに 1.7 cm で、重さも最軽量の 3.2 g しかありませんが、腰高にして分厚い形状を呈しています。



第4図 16号出土

《半欠品》中央：黄緑フェルト敷

ここでは、桑野遺跡出土塊状耳飾の半欠品を抽出してみました。



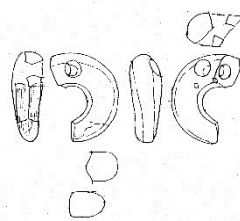
第5図 4号土壙

4号土壙（第7図）は、隅丸方形に近い楕円形の土壙（108 cm×80 cm）で、その南西側付設ピット東方から、今回は展示していませんが、長野県「カゴ田遺跡」出土類材品の塊状耳飾完品 1 対が半分ほど重なるようにして出土しました。

上位の品の方がやや大きめの品で、特にその切目幅は極めて狭く、どのようにして製作し、また装着していたのかなど考えさせられる資料です。両者の切目部方位は、ともに土壙の外側を向いていました。

また、この対品の土壙外側から上段右の滑石製の塊状半欠品（KW9）も検出されました。切目正反部には穿孔が施されており、垂飾に転用された例と考えられます。

上段左の (KW2) は、4 基のピットを連結し、東側が先細りとなる長楕円形土壙 (推 198 cm×推 124 cm) が想定される 1・2 号土壙のうち、1 基のピット付近より検出された玦状耳飾半欠品 1 点 (第 6 図) です。



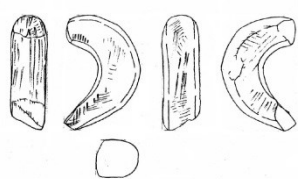
第 6 図 KW2 実測図



第 7 図 1・2 号出土品

他に玦状欠品 2 点、管玉 1 点が検出されました (第 7 図)。

また、半欠品の切目部正反にある穿孔は、破面でも観察することが出来ます。



第 8 図 KW26 実測図

8 号土壙は、楕円形の土壙 (182 cm×90 cm) で、肩部内側より今回展示していませんが、長野県「カゴ田遺跡」出土類材品の玦状耳飾完品 1 対が、土壙外面に近い高さで、若干大きめの品を下位に、重複して出土しました。

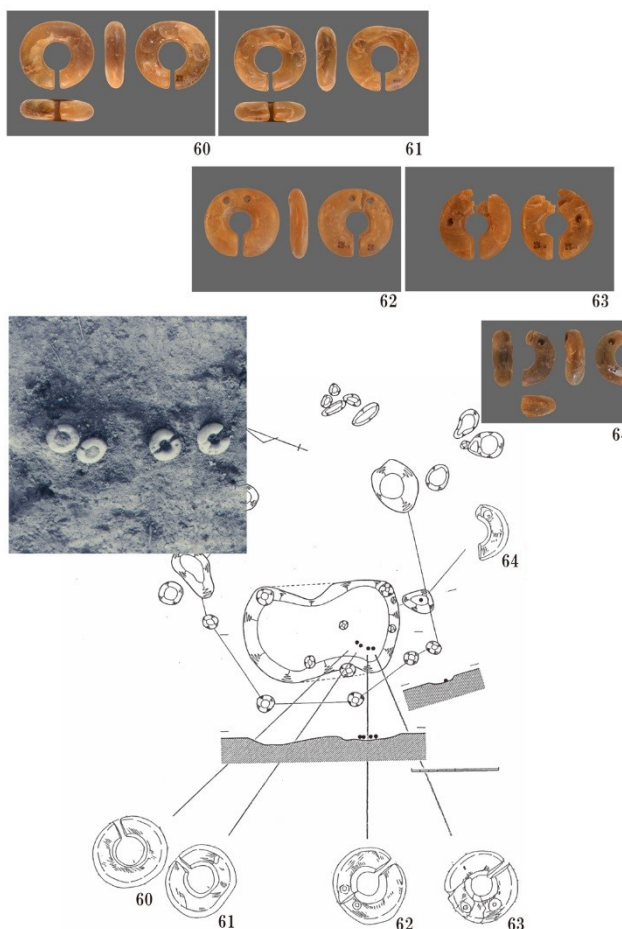
下段左の (KW26) は、滑石製の両端が磨滅した玦状耳飾半欠品 (第 8 図) で、土壙中央部から検出されました。

21・22 号 (第 9 図) : 21 号土壙は、元来隅丸方形 (178 cm×120 cm) を呈し、南西隅の底面付近から今回展示していないものの、滑石材の玦状耳飾完品 2 対 4 点が並列し出土した。

2 対 4 点の切目部方位は、北側の対品は北方を、南側の対品は南方と、対品同士の方位は等しく、対品相互では相反し、対品相互の間隔は約 6～7 cm を測る。双方とも完品であったが、南側にあった対品は共に破損していた。

土壙周囲には径 290 cm、10 穴構成のピット列が周回、北東に開口、2 対の品が検出されたのは、開口部正反奥の位置にある。

周回ピット列の中で、南方に位置する 22 号ピット底面から、下段右側の半欠品 1 点 (KW64) が検出されましたが、対品とは色調が異なり、端部正反位置に穿孔を有しています。

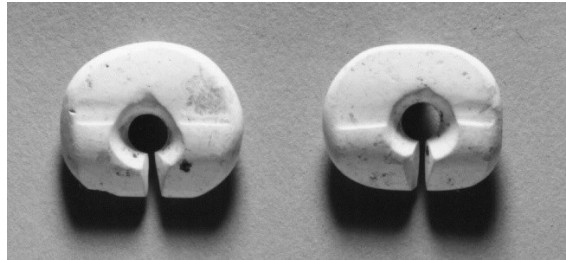


第 9 図 21・22 号土壙

《未成品様・擦切り痕》奥：紺フェルト敷

ここには、製作時の痕跡が残る玦状耳飾を主として配置しました。

左側の2点(KW71・72)は、不整円形(120 cm×116 cm)を呈していた25号土壌の北西隅から検出された玦状耳飾完品1対である。切目部方位は対品とも等しく、土壌内側を指し、わずかながら相互に外反する。中央孔は小さく、他の白色材品とは平面形が異形で、「未成品」とも考えられる。しかし、その態様について「割付線のついた玦状耳飾」(第10図)、「横位分割技法」により製作された痕跡と観察されるなど、その解釈は分かれている。



第10図 KW71(左)・KW72(右)

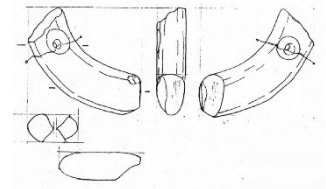


第11図 『玉器起源探索』より

周回ピット(9穴径248 cm)が区画する23号土壌の平面の南西部側、開口部からは奥まった位置で今回展示していませんが、玦状耳飾完品1対が、その内側に右側上段の玦状耳飾半欠品1点(KW66)が近接して検出されました。

切目部をつくる際には、糸鋸法が用いられた(第11図)とされ、上位から下方への端部切断が行われたとする所見が示されている。

右側下段(KW28)は、楕円形(82 cm×70 cm)を呈する12号土壌の中央部から(第12図)の品が単独で出土した。切目端部の一方のみが残存した欠品であるが、(第11図)撮影資料と同様に切目部内面端に切離しの名残を看取できる。



(橋本)

第12図 KW28 実測図

<出展品> 計13点
(内訳)・玦状耳飾 13点

重要文化財【桑野遺跡出土品】冬季特別展示 — 玦状耳飾小型品・半欠品と成形痕 —

展示期間 : 平成29年1月27日(金曜日)~3月26日(日曜日)

あわらし郷土歴史資料館

919-0632 福井県あわらし市春宮二丁目14-1 金津本陣 IKOSSA2 階

Tel : 0776-73-5158 Fax : 0776-73-1038